

日本及び其の近傍産脚鬚目[※]

Notes on Pedipalps of Japan and Adjacent Territories

高 島 春 雄

財団法人山階鳥類研究所

脚鬚目(サソリモドキ類) Pedipalpi は全蟻目に於けるが如く外貌は一定してゐない。少くも三つの著しく異なる様式の仲間を統合してゐる。其等は次の檢索表に明かである。

A 背甲は長さ幅に勝り外縁は略々平行してゐる。腹部末端の3節は圓筒状となり其の先端に尾狀附屬物を附隨せしめる……………有鞭亞目 Uropygi

B 背甲は1枚で分岐せず尾狀附屬物は長くて多數節より成り時に體長を凌ぐ。觸鬚は雄偉で先端鉗狀を成す。體矮小ならず……………
……………完甲族 Holopeltidia

B B 背甲は4乃至5枚に分岐し (Stenochrus 属のみ2裂) 尾狀附屬物は短く1~4節。體矮小で1繩以内……………裂甲族 Schizopeltidia

AA 背甲は長さ幅に劣り外縁は弧狀に膨出。腹部末端は圓く尾狀附屬物を附隨させない。第1歩脚の跗節は異様に細長で多數節より成る……………
……………無鞭亞目 Amblypygi

Uropygi Thorell (1882) は Holopeltidia Börner (1902) [異名 Urotricha C. L. Koch (1850), Oxopoei Thorell (1888)] と Schizopeltidia Börner (1902) [異名 Tartarides Cambridge (1872)] とに分れる。前者にサソリモドキ (擬

※ 東亞産全蜘蛛類脚鬚類の調査 (其の十三)

本稿は昭和19年3月完稿の舊作「帝國産脚鬚目」を終戦後の事態に即應せしめて加筆したものである。稿中に挿入の貴重な原圖をお貸し下さった佐藤井岐雄、鹿野忠雄兩博士に冒頭に於て深く御禮申し上げる。其の佐藤博士今や亡く鹿野博士亦消息無きことを想へば感慨無量のものなきを得ない。(昭和22年1月附記)

全蝸) 科 Thelyphonidae Lucas (1835)、後者にヤイトムシ (灸點蟲) 科 Schizomidae Hansen et Sørensen (1905) があるだけである。Amblypygi Thorell (1882) は族に分けるに及ばず直ぐウデムシ (腕蟲) 科 Tarantulidae Karsch (1879) のみを入れる。勿論近年學者により Holopeltidia や Amblypygi を二つ以上の科に分ける法式も採られたが、予は以上の體系で些かも事缺かぬと信するのである。

サソリモドキ科 Thelyphonidae

標徴 上掲検索表中に挙げた完甲族の標徴を具へるほかに次の如きものが算へられる。背甲は額縁に於て眼丘と2箇の中眼があり側方に各側3箇の側眼を具へる。觸鬚は基節、轉節、腿節、脛節、掌、指より成り掌と指とで顯著な鉗となる。鞭狀になつた第1歩脚附節は8節であるが第1節は極めて短くて輪狀である。第2~4歩脚の末端には2箇の爪がある。

本科には10屬約66種あるが本邦産は次の1屬のみである。

分布 主として東洋區に弘布する。印度、セイロンよりソロモン群島、ポリネシアにかけ最も多くの屬種を分化せしめ西アフリカに及ぶもの、日本の九州、東シベリアに及ぶものもある。新世界産は北米南部からブラジルにかけ數種あるが劣勢である。

サソリモドキ屬 Typopeltis Pocock (1894)

標徴 觸鬚の脛節突起は♂では變形することが著しい。即ち前縁鋸齒狀になつた棘として尖出することなく、圓壠狀或は膝曲してゐて動鉗枝の尖と稍々鉗狀に會合する。腹部の第1腹板は♂では内半にのみ中央條溝があり第2腹板は後縁に殆ど不分明の棘がある。第1歩脚附節の關節は延長し♀に見られる變形も輕微な程度である。中眼は1箇の長い圓形隆起により隔離される。第2~第4歩脚の脛節に距がある。

分布 南はシヤム、佛印から東シベリア、更に香港、廣東あたりから華中、臺灣、琉球、九州にかけての東亞の特産である。東シベリア(沿海州)から

1種が得られたのは此の類として意外な異例である。本属のものとして8種程記載されてはゐるが確實な種的標徴を帯びるものは少い。本邦に於ける代表者は次のサソリモドキである。

模式種 *Typopeltis stimpsonii* (Wood) (模式種として指定されたのは *Typopeltis crucifer* Pocock, 1894 であるが此の種は其の後上記 *stimpsonii* の異名となつた)

1 サソリモドキ

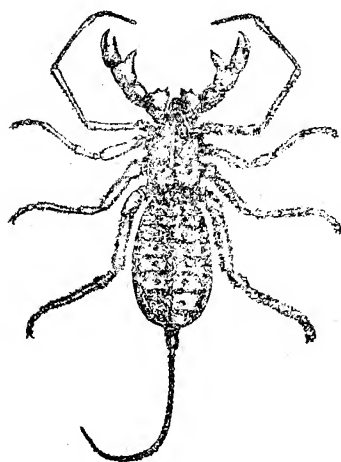
Typopeltis stimpsonii (Wood)

- 1862 *Thelyphonus stimpsonii* Wood, Proc. Acad. Nat. Sci. Philadelphia, 1862: 312 (原記載: “Japan” とあるが恐らく沖縄本島か奄美大島であらう)
- 1872 *Thelyphonus sinensis* Butler, Ann. Mag. Nat. Hist., ser. 4, 10: 205
- 1894 *Typopeltis crucifer* Pocock, Ann. Mag. Nat. Hist., ser. 6, 14 (80): 128, t. 2, f. 4-4a
- 1894 *Typopeltis Stimpsonii* Pocock, Ann. Mag. Nat. Hist., ser. 6, 14 (80): 126
- 1895 *Thelyphonus* [sp.] 黒岩、動雜、7 (85): 394 (習性)
- 1897 *Typopeltis formosanus* Kraepelin, Abh. Ver. Hamburg, 15: 14
- 1899 *Typopeltis crucifer* Kraepelin, Tierr., Scorp. etc., 209, f. 69 (記載)
- 1899 *Typopeltis stimpsoni* Kiaepelin, Tierr., Scorp. etc., 209 (記載)
- 1906 *Typopeltis crucifer crucifer* Schwangart, Zool. Anz 30 (11・12): 332, f. 1, 2 (記載)
- 1906 *Typopeltis crucifer kochi* Schwangart, Zool. Anz 30 (11・12): 336, f. 3 (記載)
- 1908 *Typopeltis stimpsoni* Iwakawa, Annot. Zool. Jap., 6 (4): 289, t. 11, f.

1-4 (記載、全形圖)

- 1916 *Typopeltis stimpsoni* Gravelly, Rec. Ind. Mus., 12 (2): 71, t. 1, f. 13
(分布)
- 1927 *Typopeltis stimpsoni* 岸田、日本動物圖鑑、954, f. 1843 (記載、全形圖)
- 1931 *Typopeltis stimpsoni* 大島、動雜、43 (516): 601 (新產地)
- 1933 *Typopeltis stimpsoni* 山口、鹿兒島高農博同會報、3 (11): 75 (習性)
- 1934 [學名無し] 永井、鹿兒島博郷土博物時報、3: 2, f. 1, 2 (新產地、全形圖)
- 1936 *Typopeltis stimpsoni* Wu, Sinensia, 7 (2): 124, f. 5 (記載、全形圖)
- 1936 *Typopeltis stimpsoni* Speijer, Mitt. Zool. Mus. Berlin, 21 (2): 252
- 1940 *Typopeltis stimpsonii* 高島、Acta Arachnol., 5 (2): 94, f. 1 (分布)
〔補遺 Acta Arachnol., 5 (4): 215〕
- 1941 *Typopeltis stimpsonii* 高島、Biogeographica 3 (3): 273, f. 1 (記載、全形圖)
- 1941 *Typopeltis stimpsoni* 佐藤、Acta Arachnol., 6 (3): 72, f. 1-8 (習性、全形圖、生態寫眞)
- 1943 *Typopeltis stimpsonii* 高島、Acta Arachnol., 8 (1-2): 18 (記載)
- 標徴 以下は成雌につきアルコール漬標品に基く。色彩 背面黒色、歩脚及び尾狀附屬物は赤味を帯びる。腹面は赤黒色、歩脚の基節は際立つて栗茶色、觸鬚の基節も赤味が強い。大腿 短小で著しくない。第2節は赤褐色で先端黒色の鉤となり同色の第3節と鉗狀を成す。其の附近は刷毛狀に毛を密生する。觸鬚 雄偉で先端鉗狀を成す。第1節基節の腹面は他の諸節よりも赤味強く少々滑かで光澤に富み前方に鉤狀の1突起がある。次の轉節は幅狭く内側に廣く陷入し背面より觀る時は内方に5棘並び生じて脊椎動物の五趾脚狀、腹面より觀る時は之に對し同じく内方に2棘起生する。腿節は肥大するが平凡。脛節は背面に於て内方に1大棘(脛節突起)を派出し尖端鋭い。掌(跗節)も形狀前

節に似て1大棘を内方に出し腹面に於ても1小突起がある。跗節(指)は單一の鉤狀で掌の1大棘と略々同大同形、掌の大棘に向つて動き兩者で鉗を成す。基節及び轉節の腹面内方には刺毛を列生、掌内面にも刺毛多く中に觸官としての機能あるらしき1長刺毛(聽毛)を混する。背甲 前後に長い五邊形狀で前縁に刺毛を粗生する。前縁に近く眼丘上に左右1對の中眼、それより側縁を成す溝に沿つて下れば各側に3箇の單眼がある。中眼と側眼を連ねるよく發達した畝を具へる。背甲には體節の區分は認められぬが、全體顆粒狀突起多く上半正中の縱溝は顯著である。胸板 觸鬚の基節、第1步脚。第2步脚の基節に劃され



第1圖
サソリモドキ ♀ 背面
(佐藤井岐雄氏原圖)

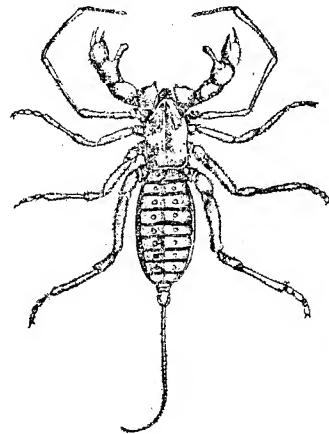
る前胸板は下向の2等邊三角形に近く、第2、第3兩步脚に挟まれた形になつて極めて狭小な中胸板があり上下2枚に區劃される。第4狀脚の基節及び第1腹板(或は第2腹板と云つたほうが判り易い)に圍まれる所上向の2等邊三角形を成して後胸板がある。腹部 小判形で13節ある。背面より觀る時は第1乃至第9腹節迄は幅廣く略々梯形であるが第10乃至第12節は急に狭まり第12節は圓筒狀。

此の先には更に狭長で體長を凌駕する鞭狀物が附屬してゐる。50節を超え細毛に交つて刺毛を粗生させる。 腹面より觀れば腹板は赤味強く光澤がある。第5乃至第8腹板に於て各1雙の顯著な陷凹がある。縦位の橢圓形に見え其處のみ光澤無く之等の凹みは各腹板を略々等面積の3區域に分割する觀がある。背面に於ては圓形の凹みに見え同じく第5乃至第8腹板に顯著である。之は内部に於て背腹兩甲板を垂直に連ねる筋肉(8對ある)があつてキチンの外皮のそれに附着する部分が斯かる凹みとして見えるのである。步脚 第1步脚は他の3對に比して著しく纖弱。基節轉節は短

太、腿節・膝脛節・脛節(脛節は基部に短い副節がある)は細長で短刺毛を粗生する。次の蹠節は跗節基方の2節がそれで跗節と合一してゐる。跗節は赤味強く9節に岐れ毛を密生する。老熟した個體では先端の2~3節は内方黒染し缺刻は個體により可成り趣異があり或る個體では左側のものに何等の異常無く右のものは上より4節目(第6節)のみが黒染し且つ缺刻を示した。第2乃至第4歩脚は形状尋常で後方のもの程長大となる。

基節の腹面は何れも滑かで光澤がある。轉節は短太、腿節は肥大して長く、短い膝節、細長の脛節、短い蹠節を経て跗節は3節に區劃され先端に鉤曲した2爪がある。蹠節と跗節とには刺毛を密生。

測定 成雌につき測定するに



第2圖
ザソリモドカリ 背面
〔佐藤井岐雄氏原圖〕

體長	尾狀附屬物長	背甲長	背甲幅	腹部長	腹部幅	大腿長	觸鬚長
40	30+x(折損)	17	10	28	13	5	21
40.5	約 45	17	9	23.5	12	—	21.5
第1 歩脚長	第2 歩脚長	第3 歩脚長	第4 歩脚長	産地			
55	31	33	44	奄美大島			
46	26	27	36.5	石垣島			

二次性徴・本種は二次性徴顯著で成雄は次の點で成雌とた易く識別される。1) 觸鬚轉節は背面よりは前方に疣狀の突起を出し之より後方は小さい4齒狀突起がある(成雌では第2齒最大) 2) 觸鬚脛節より内方に起生する突起は先端篋形に擴張し齒狀突起がある(成雌では棘狀) 3) 第2腹節は腹面に於て外縁部を除き栗茶色で僅かに盛り上つた狀を呈し中央に不明瞭な縦溝がある(成雌では此

の部分は大体四角形で中央の溝で明かに左右2區に岐たれる)。

分布 九州(熊本縣天草島下島牛深、鹿児島縣枕崎、坊、泊)、甌列島(上甌島)、南西諸島(土噶喇群島、奄美群島、沖繩群島、八重山列島)、臺灣、紅頭嶼、民國(華中、華南)等から知られる。臺灣では紅頭嶼、南端の恒春半島、東海岸では臺東から花蓮港方面まで及び、琉球では西表島、鳩間島、石垣島、沖繩本島が既知、九州は隣島の徳之島、奄美大島、諏訪瀬島、平島、口之島、硫黄島、竹島を経て薩摩半島の南端枕崎、坊、泊附近に産し又上甌島(鹿児島縣下)、熊本縣天草島下島牛深にも棲息する。牛深は分布の北限地である。民國では南京、大冶、香港其の他から採集され揚子江以南の地には相當普通なものであらうと考へられる。

ヤイトムシ科 Schizomidae

標徴 背甲は後縁に近く深い關節溝により二つに切斷され其の溝中に2小片を存し又後方のものが更に縦溝により2裂するものがある(即ち *Stenochrus* 屬を例外とし背甲は4乃至5枚に分岐してゐる)。後背板は第3、第4步脚を擔つてゐる。中眼及び眼丘を缺く。前腹部は幅廣く8枚の板を連ね後腹部は狭くて3枚の關節板を有する。尾狀附屬物は短く1~4節、♀では尖筆狀、♂では筧狀。大腮は鉗狀であるが廣く裂けてゐる。觸鬚は基節、轉節、腿節、膝蓋節、跗節(手)より成り手には懷劍狀の端鉤爪がある。第1步脚の鞭狀の跗節は8節で第2節は筒狀に延長する。第2~第4步脚の跗節末端には2上爪と1下爪がある。何れも體小さく1厘に達しない。ヤイトムシの名は疣狀の尾狀附屬物を灸點に見立てゝ與へられたものである。世界に3屬40種ある。何れも人生に何等の交渉無き動物である。

分布 熱帶・亞熱帶に多い。印度、セイロン邊から馬來諸島、ニューギニアにかけては種類最も多いが濠洲本土からは未だ報告が無い。北米南部から中米、西印度諸島、南米にかけても種類多くアフリカ大陸及び屬島からも

數種知られるが歐洲には自生しない。

ヤイトムシ属 *Schizomus* Cook (1899)

標徴 *Schizonotus* Thorell (1888) (nom. praeocc.) は本属の異名である。背甲は4裂(背板は二岐しない。併し次出の *Trithyreus* と擬ふやうな正中の縫合が見えたりする種類もあり餘り頼母しい標徴ではない)。背甲の側方に眼状部を缺く。♀の尾狀附屬物は4節。第1歩脚第3節の第3節は明かに第4節より短い。16種あるが日本近傍産はまだ次の1種のみである。

分布 東アフリカ、印度、ビルマ、臺灣、琉球、北米テクサス、メキシコ、西印度諸島、南米等熱帶・亞熱帶に分布は汎い。小さいので蜘蛛などの如く他物に附着して温帶の文明國に紛れ込む機會を時たま作るものらしくセイロン島産の *Schizomus crassicaudatus* の生きたのがバリーで見つかったさうである。

模範種 *Schizomus crassicaudatus* (O. P. Cambridge, 1872) [sub: *Nyctalops*]

2 ヤイトムシ

Schizomus sauteri Kraepelin

1911 *Schizomus sauteri* Kraepelin, Mitt. Naturh. Mus., 28: 100, t., f. 2a-h
(原記載: 臺灣高雄)

1936 *Schizomus sauteri* Spéijer, Mitt. Zool. Mus. Berlin, 21 (2): 260 (目錄)

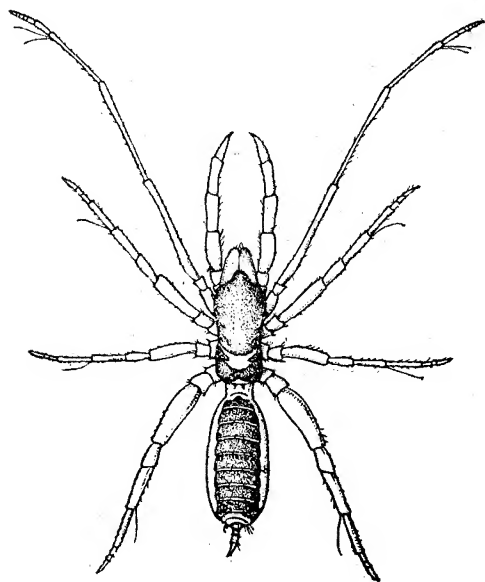
1941 *Schizomus sauteri* 高島, Biogeographica, 3 (3): 277 (新産地)

1941 *Schizomus sauteri* 高島, Acta Arachnol., 6 (3): 94 (新産地、全形圖部分圖)

1943 *Schizomus sauteri* 高島, Acta Arachnol., 8 (1・2): 22 (記載)

標徴 予は本種の♂を入手し得ないのであるが Kraepelin の原記を参照すると比較しつゝアルコホル液浸の成雌に基き記載する(臺北州芝山巖産のもの)。色彩 前方の大形の背甲は尙赭色、他は概して灰色、歩脚の上面に於ては灰色味が強い。大腿は帶赤色、觸鬚は尙赭色。觸鬚 兩性共大體同様の構造を示す。

基節は背甲下に隠れる。轉節は兩性共前方に鈍い彎曲を有するのみで長い突起を起生させない。此の膨出の側面觀は♂では稍々直角に近く♀では110度位である。♀には外方縁に1小棘がある。腿節は♂では長さは太さの2倍、♀は稍々太短く共に下縁は尖頭或は突起を持たない。次の膝脛節は♂では長さは幅の2倍を少し超え♀では幅の2倍より稍々短い。脛節は兩性共單なる圓筒狀で長さ



第3圖

ヤイトムシ♀背面
加藤氏採集臺灣產標品に基く〔原圖〕

は太さの3倍、跗節には末端に其の長さの半に達する爪を具へ其の後下方に1雙の棘がある。各節に毛を生ずるが末端に近きもの程密である。背甲 4枚に分岐し前方のものは特に著大、稍々西洋梨或はペン先形。眼丘は認められぬ。次に三角形の1雙の小片を隔て後方の1枚がある。後方の背板は幼體や♀では正中に沿ひ非常に明白な白色線條が

あり2枚に分岐してゐるかの觀がある。成雄だと細い區劃線として併し常に認め得る程度に残つてゐる。腹部 12節より成る。背面では各背板間に關節膜が良く發達してをり、各板から1對の後方に向ふ刺毛を起生させる。♂の尾狀附屬物は上面觀は稜の圓い三角形で幅よりも僅かに長さ勝り(即ち心臟形)、柄部は板狀部(主部)の半にも達しない。側面觀では基部に1小隆起があり、次に圓味ある陷凹を隔て、正中に沿ひ一層強い隆起があり、之は次第に後方に平になる。剛い刺毛が特に板狀部の下方及び末端に見られる。♂の最後の腹節は背面後縁に於て2缺刻がある。♀の尾狀附屬物は長さは幅の4.5倍、4節あるが其の

分界は餘り明瞭でない。上方から觀れば殆ど眞直、最後の節に於てのみ後方に幾分尖小となる圓筒形、長刺毛を粗生してゐる。歩脚 第1對は細長で鞭狀を成すが第4對のものより著しくは長くない。基節は長さは幅の約2倍、轉節は長さは幅の約1.7倍、腿節は長さは幅の數倍、以下の節も何れも細長、膝脛節より2本の聽毛を出してゐる。跗節は中央より少し手前で分界を示し以下6小節に岐れる。末端に爪を缺く。第2乃至第4對は何れも7節で聽毛を1本宛具へ跗節は3節で末端に1雙の鉤爪を具へる。第4對の腿節は長さは幅の3.5倍を超え發育顯著である。測定 沖縄本島産1♀に就き計測するに

體長*	背甲長	大顎長	觸鬚長	腹部長	尾狀附屬物長	第1 步脚長	第2 步脚長	第8 步脚長	第4 步脚長
1.82	0.75	0.3	0.8	0.9	0.17	1.35	0.9	0.82	1.2

二次性徴 觸鬚の様子で雌雄を鑑別し得るが最も顯著なのは尾狀附屬物である(上述)。

分布 南西諸島(沖縄本島)、臺灣(高雄、臺北州士林郡芝山巖)から知られる。Kraepelin の檢したのは H. Sauter が臺灣高雄で採集した多數の♂、♀及び幼體でHamburger Museum に保存される。邦人では加藤正世氏が1926年3月14日芝山巖の石下で1頭を獲、其の後數回通つて採集に努め更に2頭を獲られた。予は此の内の1♀(最初の1頭)を拜借して檢し後に江崎悌三博士も調べられた。現在は加藤氏の手許に戻つてゐる。他の2頭は今では行衛が判らなくなつてをる。其の後當眞嗣元氏が沖縄本島首里で3♀♀を採集し予は之を檢してやはりヤイトムシとした。現在予の手許に保存してある。斯かる次第で本邦には♂標品は1箇も存在しなくて不便である。

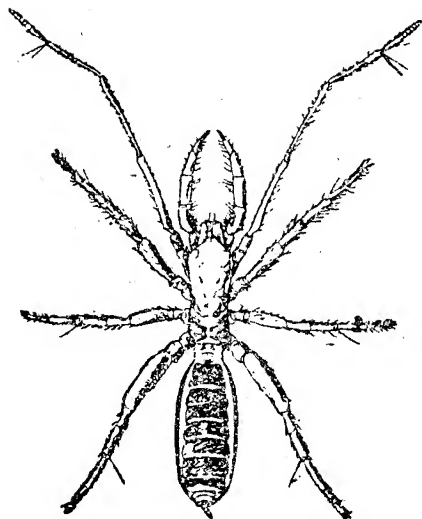
サワダムシ屬 *Trithyreus* Kraepelin (1899)

標徴 *Tripeltis* Thorell (1889) (nom. praeocc.) は本屬の異名である。背甲は5裂(後背板は縱溝を以て方形を成す左右の2枚に完全に分離するか或は狭く透明で色無き稍々膜質の中間部で隔てられる)。背甲側方は眼狀部

* 前背板先端より尾狀附屬物末端までの長さ

を存し或は缺く。鞭状跗節の第3節は大抵第4節と等長。♀の尾狀附屬物は3節。

23種ある。



分布 アフリカ、印度、ビルマ、シ
ム、シンガポール、比律賓、小笠
原、ニューギニア、ニューブリテン
等に分布し北米加州から1種記載
されたのは異例とすべきである。
日本近傍では小笠原で1頭採集さ
れたきりである。

第4圖 サワダムシ ♀ 背面
岸田久吉氏。(1930)に據る、
但し側面圖を略す

模式種 *Trithyreus grassii* (Thorell, 1889) [sub: *Tripeltis*]

3 サ ワ ダ ム シ

Trithyreus sp.

1930 *Trithyreus sawadai* 岸田 “(nom.nud.),” *Lansania*, Tokyo, 2 (12): 19, f.

1 (全形圖、部分圖)

1943 *Trithyreus sawadai* 高島, *Acta Arachnol.*, 8 (1・2): 20, f. 4

1929年澤田秀三郎氏が小笠原に採集旅行を試み同地産の蜘蛛類標品を岸田久吉氏に贈られたところ、其の中に *Trithyreus* に属するものあるを岸田氏が見出し、氏は和名も學名も採集者に因みサワダムシ *Trithyreus sawadai* と定められ♀の全形圖を示された。併し其の後此の種を正式に記載せられず他に採集した人も無いので小笠原に *Trithyreus* の1種が採集されたとだけでそれ以上の

詳細は判らない現状なのは残念である。

ウ デ ム シ 科 Tarantulidae

標徴 背甲は長さは幅に勝り外縁は弧狀に膨出し半圓形或は腎臟形を成す。腹部は卵形、12節あつて後方の3節は極めて萎縮し多少疣狀に挺出してゐる。併し概觀は圓く尾狀附屬物を附隨しない。觸鬚の腿節と脛節とに長い側方棘を具へる。手(觸鬚の第5節)も同様。指に當る跗節は懷劍狀。第1歩脚は極端に長い纖弱多節の鞭狀跗節に終る。

本科はフリニクス亞科 Phrynichinae Simon (1892), タランツラ亞科 Tarantulinae Simon (1892), カニムシモドキ(擬蟹蟲)亞科 Charontinae Simon (1892) の3亞科(之等の亞科を夫々科に獨立させる學者もある)に分れ約53種あるが本邦近傍産は最後の亞科に入る。

分布 熱帶・亞熱帶のアメリカ、アフリカ、アジア及び濠洲其の他近傍の諸島嶼に産する。

カ ニ ム シ モ ド キ 亞 科 Charontinae

標徴 中胸板と後胸板は扁平で幅は多少長さには勝る。手は曲げれば脛節と直角に對向する。脛節の側棘はほんの僅かしか前方に向はぬので伸ばされた手の基部を殆ど越えない。第4歩脚の脛節は4(稀に3)節、跗節は5節である。跗節末節には明かな褥盤を有する。

8屬ある。

カニムシモドキ屬 Charon Karsch (1879)

標徴 觸鬚の脛節は板狀に擴がらない。其の上稜には殆ど同様な2長棘がある(之等の2棘は脛節に見る他の棘よりもすつと長い)。手は1長棘を上稜及び下稜に具へるのみか或は缺く。腹部第2腹板の縁は明かな起伏がある。

此の屬内に幾つもの種類を置く細分主義者もあるが予は次の1種あるの

みと看做す。

分布 馬來半島からジャワ、アムボイナ、ニューギニア、ビスマルク群島、ソロモン群島、比律賓、臺灣紅頭嶼、パラオ島に産する。

模式種 *Charon grayi* (Gervais, 1844) [sub: *Phrynus*]

4 カ ニ ム シ モ ド キ

Charon grayi (Gervais)

1844 *Phrynus grayi* Gervais, Walckenaer, Ins. Apt., 3 4: (原記載: マニラ)

1879 *Charon grayi* Karsch, Arch. Naturg., 45 (1): 196

1888 *Charon papuanus* Thorell, Ann. Mus. Genova, 26: 345

1892 *Charon Grayi* Simon, Ann. Soc. Ent. France, 41: 48

1899 *Charon grayi* Kraepelin, Tijds., Scorp. etc., 247, f. 91 (記載)

1936 *Charon grayi papuanus* Esaki, Lansania, Tokyo, 8 (75): 80, t. f. 1-3
(新産地、全形圖)

1936 *Charon grayi* Speijer, Mitt. Zool. Mus. Berlin, 21 (2): 262 (目錄)

1941 *Charon grayi* 鹿野、大南洋文化と農業、100, f. 27 (全形圖)

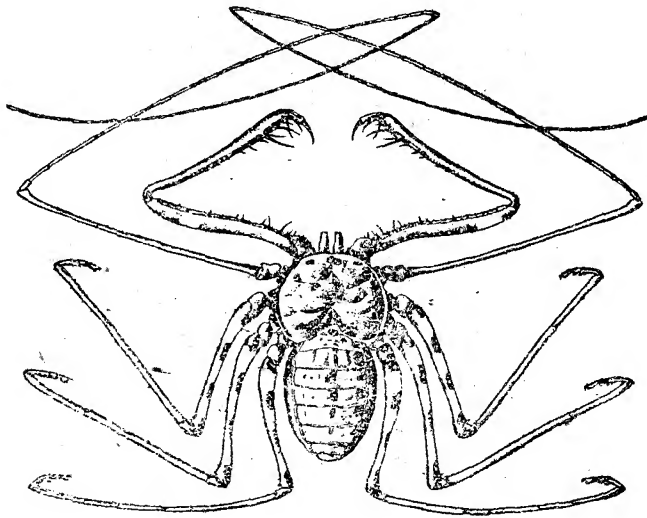
1941 *Charon grayi* 高島、Biogeographica, 3 (3): 276 (目錄)

1941 *Charon grayi* 高島、Acta Arachnol., 6 (3): 88, f. 2-4 (記載、全形圖)

1943 *Charon grayi* 高島、Acta Arachnol., 8 (1-2): 23, f. 5, 6 (記載、全形圖)

標徴 パラオ産成雌に就き記載する。乾燥標品であるが其の色彩は生時と略々同様なる旨を標品所持者江崎梯三博士が證言して下さつた。色彩 背面暗褐色で背甲は黒味強い。歩脚は第2乃至第4のもの濃褐色帯と淡褐色帯と交互に並び縞を成す。腹面は赤黒色、生時は恐らく歩脚の基節は際立つて栗茶色ではなかつたかと想ふ。歩脚の他の部は背面と同色であるが斑紋は不分明。大腿 短小。第2節は略々圓筒狀で刺毛を粗生し顆粒多く、第3節は鉤狀で光澤があり刷毛狀に多數の毛を密生。觸鬚 長大で一見第1歩脚狀。基節は上面からは背甲に隠れて見えぬ。下面では顆粒多く内側方にのみ毛を密生し稍々刷毛狀。轉節は

内面黒色で光澤がある。少數の小棘を具へる。上後兩縁邊には少數の棘を列生する。毛は少い。腿節は多少外方に弧狀を成す長圓筒狀で大小の顆粒に富み上後兩縁邊には棘を列生、其の内數本は長棘である。長棘を生ぜざる部分も縁邊鋸齒狀を成す。毛は誠に少い。上面は栗色の部分廣く存するのが目を惹く。脛節は前節より僅かに長く圓筒狀、上後兩縁邊に長棘を派生し、派出しない部分も鋸齒狀、上面端部に近い2棘は殊に大きく且つ鋭い。外縁部には刺毛を列生す



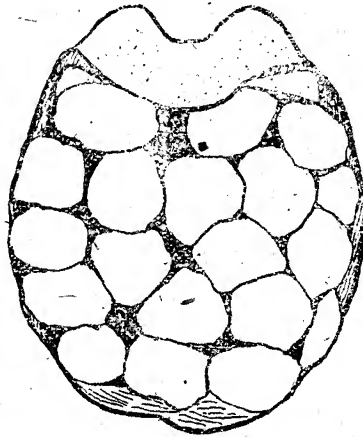
第5圖

カニムシモドキ♀背面
鹿野忠雄博士(一五)に據る

る。脛節は基部太く先は稍々細まり基部に近く1雙の大棘を、端部に近く各側1~2本の小棘を派生せしめる。外方は刺毛が多い。蹠節は全體細く鋭く内曲せる1鉤となり蹠節よりも長い。基部より $\frac{3}{4}$ までには内面に刷毛狀に毛を密生する。
背甲 明かに幅は長さに勝り外縁圓く前縁に刺毛を粗生。額縁に接近して中央に中眼丘高く起出し2箇の中眼、間を隔てゝ存する。其の左右に側眼丘を見るが中眼丘よりもずつと低く各3箇の側眼鼎足狀に並ぶ。側眼も中眼より小さい。背甲は顆粒を密布し且つ凸凹多く、正中に沿ひ上方より $\frac{3}{4}$ の邊にある陷凹を中心に斜上及び斜下に走る條溝は著しい。周縁は一樣に窪んでゐる。歩脚 第1

歩脚は目覺ましく鞭狀に伸長し頗る奇異の觀を呈する。轉節は他の歩脚のそれと略々等長で尋常であるが、腿節は他脚の脛節と同じ位の太さの棍棒狀で刺毛と細毛とを混生し、次に短い膝節を経て鞭狀或は絲狀の脛節となる。25小節を算へるが何れも刺毛を生じ最後の節は端部膨出。跗節は44節より成り各節細毛を派生、先端程毛は多くなる。爾後の歩脚は纖細ではあるが歩脚狀を呈してゐる。

腿節は最も幅廣く互に並ぶ様は比較的單を惹く。多數の刺毛をく脛節は棍棒狀で腿節生し端に近く1聽毛をは愈々密なるのみならば本を生じ端部に於てはの刺毛は内側に於て刷ゐて第1節は長く、短



黒褐色帶と褐色帶と交調な他部の色に比し目生じてゐる。膝節は短よりも長く、刺毛を密生する。脛節では刺毛す聽毛は數本乃至十數房狀に叢生する。跗節毛狀に列生、分節してい第2、3、4節を経て第

第6圖 ブーゲンビル島産カニムシモドキ♀が腹面に把持する卵囊を示す、乾燥標品につき各卵は萎縮して球形を呈しない、上方に第2腹板、其の下に第3腹板の一部が見える ×5.2〔原圖〕

5節は2歧し上葉は先端細長く鉤狀に延長し爪上葉となる。下葉は太短くて末端に2鉤爪を附随せしめ其の内方は特殊の褥盤となる。第4歩脚のみ脛節は4節に區劃される。腹部 上面よりは鑒長小判形。12節あるが第1節は微小で第2節に蔽はれてしまふ。最後の3節は顯著ならざる後腹部を成す。色彩は暗黒褐色で背板後縁は廣く褐色を呈する。頗る顆粒に富み毛は少い。下面は上面に比して汚褐色味強い。第2腹板後縁に性差を示す。胸板は前胸板は槍形で刺毛多く中胸板は2箇に分れ略々圓形、後胸板は後廣の五角形狀である。測定 次に4例を掲げる。始めの2例は江崎博士の計測せられしものである。

性	體長	背甲長	背甲幅	腹部長	腹部幅	觸鬚腿節長	同脛節長	第2步脚腿節長	産地
♂	20.5	7	11	11	7	14.5	15	12	パラオ
♀	23	7	10.5	12	7.5	11.5	12	11.5	ク
♂	27	10	15.5	17	12	26.5	28.5	22.5	ミンダナオ
♀	30	9.5	15	20.5	11	22.5	25	21.5	ク

二次性徴 1) ♂では觸鬚腿節長(或は脛節長) > 第2乃至第4步脚腿節長、♀では觸鬚腿節長 < 第2乃至第4步脚腿節長が便利な手懸りである2) ♀は體長♂に勝る。これは♀の腹部長が♂のそれを凌ぐからである。併し背甲幅は♂のはうが稍々勝つてゐる3) 腹部第2腹板は♀では上縁は内方に殆ど彎曲しない、正中に近い2縦溝は明かであるが♂程深刻でない、下縁の側方(左右)は弧狀に挟られる、下縁中央部の缺刻は認められぬ程。然らざるものが♂である。

分布 日本近傍ではミクロネシアのパラオ群島、臺灣の紅頭嶼から知られる。前者では1926年以來今日まで少くも11頭、後者は1933年以來十數頭獲られてゐるが、どちらでも普通のものでないことは確かである。比島では普通(本種の基産地は比島マニラ)。馬來半島には稀。他にジャワ、スマバワ、アムボイナ、ニューギニア、ビスマルク群島、ソロモン群島など分布は汎い。姿が奇怪なので嫌惡されるが全く無害である。

〔後記〕

戦後の日本では脚鬚目といへばサソリモトキ1種きりとなつた。此の種は見かけは厳しいがサソリと違ひ無毒である。たゞ腹端に開口した腺から醋酸臭の強い分泌液を奔出させる。之は不快な臭氣を伴ふばかりでなく皮膚を刺戟する。併し野外で遭遇した場合はいくらでも避けられるから物の數でもない。

補 足

本誌前號に「南方諸地域に於ける脚鬚目概説」と題する拙稿を掲げたが、書き出しを次のやうにすべく原稿を用意したのにうつかりして此の部分の掲出を忘れてしまつたので妙な次第であるが此處に掲げる。

南方諸地域に於ける脚鬚目概説

高 島 春 雄 Haruo Takashima

東京文理科大學動物學教室

内 容

I	脚 鬚 目 鳥 瞰……………	32
II	南方諸地域に見る代表的の種類……………	39
III	臺灣紅頭嶼産全蜘蛛目及脚鬚目……………	48
III	脚 鬚 目 の 分 布……………	49

本稿は同じ著者の「南方諸地域に於ける蜘蛛概説」と姉妹篇を成すもので去る昭和19年1月脱稿した。爾來今日まで上梓の機を得られなかつたが其の間に戦火は本稿の最後の章V参考文献を亡失せしめた。脚鬚目は節足動物門蛛形綱中にクモ・メクラグモ・サソリ等と對等の位置を占める1目であるが本稿は今後曾ての“南方 園”を支配し或は其處に動物學的踏査を行ふ人々にとり多少お役に立つかと思ふ。先づ脚鬚目の標徴、分類體系を記し属までの検索表を掲げて同好諸氏の便に供し、次に南方諸地域に見る代表的の種類を挙げたが日本産、中國産のものには稍々詳しく觸れた。臺灣の紅頭嶼は動物地理學上特異の地位を占めるが鹿野博士の採集品に基き同島産サソリ、サソリモドキに關し略報した。本稿を成すまでに多くの同學の方々の御援助を蒙つて居る。顧みて深き感謝を捧げたいと思ふ。特に此の類にも多くの關心を持ち研究された故廣島文理科大學教授佐藤井岐雄博士の不幸な御最期を懷ひ御冥福を祈ること切なるものがある。